医療栄養学科の授業評価結果に対する考察（平成 26 年度）

副学長・医療保健学部医療栄養学科長
小西 敏郎

医療栄養学科の教員全員が、社会で活躍できる管理栄養士の育成を目指して、それぞれ学生による授業評価を参考にしながら授業の改善・工夫の努力をしている。今回の評価から、多くの学生は集中して授業に取り組めたものと判断しているが、さらに改善を加えていきたい。

1. 授業評価に関する感想

講義・演習科目

- 毎年の結果をみると、学生自身の授業態度についての評価点が低いと授業内容についての満足度も低い傾向が見られる。学生が「面白い」と思う授業が学生にとって「よい授業」であるかについての判断は難しい。
- 学生の中に積極的に取り組んでいないとの回答があったが残念である。
- 医療栄養学科の学生には、食や栄養と関係のない「データサイエンス」は、苦手意識があり、嫌いな科目となりやすいため、「食文化論」や「食育論」より、「データサイエンス」への評価は厳しいものとなっていると感じる。

実習・実験科目

- 実習授業の評価点はとても高いが、これはできるだけ学生中心で授業進行できるように内容を工夫しているからと考えられる。
- 1年次生は、入学前の調理経験がかなり少ないという状態で実習しているが、学生は、少しずつ出来ることが増え、理論と実技が関連できるようになり、またグループワークにも慣れてきて、実習にも積極的に参加してくれるようになった。そのため理解度が把握し易く、授業中に臨機応変に対応できたことが評価に繋がったと思う。
- 「調理学実習Ⅰ・Ⅱ（1年次・必修）」では、技術や知識を身につけることと併せて怪我や事故の防止、衛生管理などに配慮して安全に実習するため、厳しく指導しているが、“自分達のことを考えて厳しくしている”と理解してくれており、「やりがいがあった」という評価もあった。

2. 授業において工夫した点について

講義・演習科目

- 医療現場そのものでの視点と客観的・社会的視点、また、医療従事者と患者など、双方、多方面から物事を考えるというスタイルで授業を進めている。特に学生に馴染みのない分野では、できるだけ業務現場の具体例を提示している。また、教科書べったりの授業をしないようにしている。
- 理解しやすいように配布資料の中の表示の仕方を丁寧に示したり、必要なポイントは赤字で提示したり、管理栄養士国家試験問題を比較的早い時期から取り入れたりして、学生の意欲・理解力の向上を図った。

- 修得度の向上を目的に、毎回の授業のねらい・内容を明記した資料を配付し、到達目標を明らかにした。
- 1回目の授業の始めに前学年次の振り返りを含めた課題を加え、以降の課題がスムーズに取り組めるようにした。
- 講義の初めと終わりに小テストを行っているが、終了時の小テストは授業のポイントの確認と自己の理解度を把握するため、開始時の小テストは前回の授業の復習である。2回の小テストで約15分を要するので講義時間が短くなることを懸念したが、終了時の小テスト後、できなかった問題を教科書やノートで確認してから退室するようになり、授業開始前には教科書やノートで前回の内容を復習するという姿勢が見られるようになった。その効果か、小テストの点数も良くなっている。
- 以前は講義のスライドを配布していたが、プリントがあることで安心してノートを取り忘れることが見受けられたため、しばらく配布しなかった。平成26年度は学生の要望もあり、配布した。配布スライドは「全てではなく抜粋とする」「スライドに書き込む部分を入れる工夫をする」「記入漏れがないように注意する」などを心がけたものを配布したところ、授業進行がスムーズになった。
- 授業についていけない学生が出ないように、また、授業中は集中して問題が解けるように、その日の授業レポートはその授業内の時間にメール提出させる方法をとった。
- 学会や研究雑誌などでの最新情報を授業に取り入れ、学生たちの興味関心が深まるような工夫をしている。
- 基礎科目と専門科目の相互理解が深まるような授業展開・内容を計画し取り組んだ。また、学生に理解度を確認するために確認テストを取り入れた。
- 昨年度の評価で「声が小さい・聞き取りづらい」との意見があったため、マイクを使用することにより、改善を図った。
- 動画など、視聴覚教材を取り入れた。
授業で小テストを行い、前回の授業の復習を行うなどの工夫を行った。
- 授業の最初の時間は、前回の授業の復習のようなことから始めるようにして、なるべく15回の授業に一貫性があるということを意識して授業を進めた。

実習・実験科目

- 実験では、化学実験の経験のない学生でも不安なく授業に取り組めるように、説明・計算式をより丁寧に記載するとともに、学生とのコミュニケーションを図るために、班ごとにわからない点などを聞いて回るようにした。
- 実習は学生らの自主的な取り組みを尊重し、それに基づく授業進行に重点を置いている。また実習は、十分な理解の下、慎重に確実に実施するというより、「数や量をこなす」ことを重視している。

教職科目

- 受講生の増加があり、関心・意欲・態度また基礎学力にかなりばらつきがみられたが、授業内容のレベルは敢えて下げずに、かつ学生の発表や討論を加え、密度を濃くした。

3. 今後の授業について

講義・演習科目

- 評価が低い項目については、可能な限り改善し、今後の授業計画や授業展開に反映したい。また、記述に記載されていた内容について配慮し、授業を実施したい。
- 学生はなかなか質問をしないので、学生の反応をよくみてわかっていないと感じたら、できるだけ説明を補足することにより、学生も安心して受講するようにしたい。
- 授業のまとめを行うことで、学生の理解度が増したように感じた。またその点を評価された要素もある。授業の整理は引き続き行いたい。
- 4年次生の講義では発展的内容も多いので、基礎学力が不足している学生のフォローが足りなかったと分析している。多様な学生への支援の視点から、できるだけ丁寧な解説を行うことにする。
- シラバスに記載の事項については、毎回の最後に復習内容と予習内容を明示し、学生の自己学習を促した。また、復習内容に関し、次の授業開始時に小テスト(5分間、記述式)を実施しているが、平成26年度は白紙回答者が複数出てきたため、平成27年度は実施方法を工夫する。

実習・実験科目

- 実験などの体験型学習が初めての1年次生には、学生への問いかけ・コミュニケーションを図り、興味・関心を抱かせることができる授業となるよう努力する。2年次生・3年次生に対しては、学生の理解力の向上並びに将来の管理栄養士国家試験合格のための基礎学力の充実を図れるように努力する。
- 授業を行っていても、学生が十分に理解できていないように感じるものが時々ある。内容の理解度を高められるよう、配付資料を工夫する。
- 実習中は教員も学生も慌ただしく作業をしているため、コミュニケーションをとる時間が確保できない状況があるので、試食した感想や調理作業の疑問などを試食中に聞ける工夫をしたい。
- 実験の待ち時間については、有効活用してほしいという意見が寄せられていることから、演習課題を設けるなど時間の有効活用を行っていききたい。

教職科目

- 今回の授業評価結果で、「教職科目のレベルを下げない」「選択科目での臨機応変な対応」に関しては評価されていることから今後も柔軟な授業方法を行っていききたい。
- 単に栄養教諭の資格を取るということだけでなく、その意義についても説明し、積極性を持たせたい。

4. 学生に対して

- 身体を動かす実習や自分で選択した授業は楽しく、興味深く、面白いようだが、基本的な事項を知ることが中心の座学の必修授業には関心を示さない

学生が多いように思われる。

- 当学科のいずれの教員も、能力、意欲に大きく個人差のある学生諸君に対して、すべての学生が学ぶことの楽しさや学び方に、興味を持って取り組めるように熱意をもって授業改善に努めて取り組んでいる。学生諸君は、それをよく理解して、授業中に自分が理解できないことがあればみずから質問し、不満があればその都度教員に伝えてもらいたい。むしろ教員が質問はないか問いかけても反応がないことが多い。もし、授業中に質問するのは恥ずかしい、気後れがするようならば、授業終了後でも構わないので、どんどん質問し、また意見を述べてほしい。